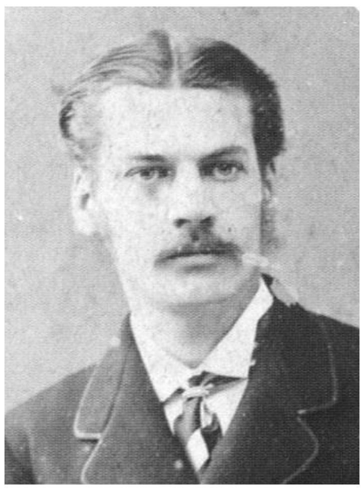
蛭ヶ岳山荘通信　第76号

発行日　令和２年２月３日
発行者　北丹沢山岳センター
事務局　神奈川県相模原市緑区小渕 1545-1
TEL042-687-4011　FAX042-687-3980

甲州街道から観た青根山は多くロマンを残し　蛭ヶ岳山荘　杉本　憲昭



旧津久井郡から見る南斜面側に聳える山は「青根山」と称し、古い名で明治に日本を訪れたイギリス人のアーネスト・サトウも日本旅行記に書いている。地元では境界争いが起こり、古くは徳川家康から始まり日本の夜明けとなった明治時代になってやっと解決したことも記されている。特に徳川時代は幕府の直轄地として山が守られ、この地に生えている下草カヤは村人から茅葺屋根の材料に利用され、刈り取ったものは重いので一年近く乾燥し村々へ持って帰ったのである。これをカヤ場として地元民に開放し、焼山・姫次・原小屋平・地蔵平・蛭ヶ岳などが多く使用されていた。また青根山は古来には万葉集にも歌われていたと地元の歌人である石井達夫さんが教えてくれた。　丹沢山塊の地名も多くは明治の測量によって命名されたと云われる。元は山小屋も登山する人のためではなくこの草刈り場での作業の為に、原小屋・地蔵小屋・蛭ヶ岳山頂の山小屋や臼ヶ岳寄りにあった小屋などは作られたものであった。

写真）アーネスト・サトウの肖像

大変貴重な資料　昭和九年五月　朋文堂発行「東京附近山の旅」より蛭ヶ岳・丹沢山縦走の記事を転載します

蛭ヶ嶽・丹澤山縦走　地圖（上野原・秦野）

岩崎　京二郎　著

日歸り

新宿驛—(小田原急行電鐵)—澁澤驛—大倉—塔ヶ嶽—丹澤山—蛭ヶ嶽—姫岳—燒山—鳥屋村—橋本驛—新宿驛

新宿驛(小田急前夜發)—(一時間半)—澁澤驛—(一時間)—大倉—(三時間半)—塔ヶ嶽—(三〇分)—龍ヶ馬場—(二〇分)—丹澤山—(三〇分)—不動ノ峯—(三〇分)—鬼ヶ岩—(三五分)—蛭ヶ嶽—(一時間)—(姫岳—(一五分)—八丁坂—(二〇分)—井戸澤源頭—(一五分)—黍殼—(三〇分)—燒山—(二時間)—鳥屋村—(バス五〇分)—橋本驛—(一三分)—八王子驛—(五〇分)—新宿驛。

費用　概算二圓四六錢。新宿驛—澁澤驛(一圓二三錢)。鳥屋—橋本驛(バス五〇錢)。橋本驛—新宿驛。(七三錢)

二日行程　その一

新宿—鳥屋村—燒山—姫岳—蛭ヶ嶽—丹澤山—塔ヶ嶽—大倉—澁澤

〔第一日〕 新宿驛—(約五〇分)—八王子驛(乘換)—(一三分)—橋本驛(橫濱線)—(バス五〇分)—鳥屋村泊。

〔第二日〕 鳥屋村—(二〇分)—平戸—(二時間半)—燒山(▲一〇五九・六米)—(二五分)—黍殼(▲一二七二・八米)—(一〇分)—井戸澤ノ源頭—(三〇分)—八丁坂—(二〇分)—姫岳(姫次原)—(二〇分)—地藏澤小屋下り口(注、水まで八分・小屋まで一五分)—(一時間二〇分)—蛭ヶ嶽(▲一六七二・六米)—(二〇分)—鬼ヶ岩—(二五分)—不動ヶ峯—(三〇分)—丹澤山(▲一五六七・一米)—(一五分)—龍ヶ馬場—(三〇分)—塔ヶ嶽(▲一四九一・二米)—(一時間一〇分)—一本松—(三五分)—大倉丹澤山登山道々標—(五分)—大倉部落—(一時間)—澁澤驛—(一時間三五分)—新宿驛。

費用　概算三圓四五錢(但一泊一圓の計算)。新宿驛—橋本驛(七三錢)。橋本驛—鳥屋(バス五〇錢)。澁澤驛—新宿驛(一圓二二錢)。鳥屋旅館半泊(五〇錢乃至一圓)。

橋本—鳥屋間バス一日九回往復す。

二日行程　その二

新宿驛—與瀨驛—青田—牧馬—青野原—長野—燒山……以下その一コースに同じ

〔第一日〕 新宿驛—(一時間一〇分)—與瀨驛—(三〇分)—青田—(五〇分)—篠原—(四〇分)—牧馬(三〇分)—青野原村半宿。

〔第二日〕 長野經由—(約二時間)—燒山▲—以下前項タイム參照。

この尾根歩るきを丹澤主脈縦走などゝいつてをる方があるが別項所說の如く、南北のこの尾根を丹澤山塊の主脈といふのは如何かと思ひ標題の如く蛭ヶ嶽丹澤山縦走とした。

東京を夕刻に發ち八王子乘換橫濱線橋本下車、バスに依れば鳥屋の春木屋あたりで半泊する事にならう。與瀨驛へ下車して青野原へ出るとすれば、なるべく遲く發ちたいのだが不定期列車の出ない頃だと午後七時五七分韮崎行以後は四〇一、四〇三の二列車ともあいにく與瀨不停車で時間が馬鹿に餘る樣だが夜の九時七分下車しても初めての道ならば、里道の發達した日連や篠原の交錯した迷路はよい工合に時間を喰つて吳れる。

道志川を立派な架橋で渡ると青野原村である。勿論こゝへは用心深く鼠坂から寸嵐の本道を通り横濱水道の貯水池脇から鮎子へとぐるりと廻つて堂々と街道を來る事も出來るが道志橋へ出るまでゝさへウンザリする程變化が乏しいので長い感がする。しかしその代り地圖を出して考へる處はない。居住屋、若松屋などに明日の長コースに備へて假泊、疲を醫やすのも固より賢いやり方である。又狹穢な宿に一夜を燻ぶるより、道志川の瀧の樣な瀨音を聞き乍ら、星斗燦たる無窮の空を天井とするのも、明け易き初夏ならば山に入る前奏曲として面白からう。

昧爽、燒山(一〇五九米)三角點に立つ氣分は格別だ。海老茶がかつた濃い紫のうなだれてつゝましく咲く銀色の天使ともいふべきオキナグサが點々と開く燒山の頂上は近い道志の山々は勿論、高尾、陣馬、大菩薩、大岳の諸嶺を一眸の下に集めてゐる。

燒山に登る順路は鳥屋からは村役場の前を通り串川に沿ひ、御屋敷で本道と別れ右折、大上と稱する新しい地圖(昭和四年修正)の平戸で大平の道と分れ、澤を離れて右へ登ると、役場より休憩を入れて二時間半、青野原村からは、長野の部落を出はづれると小澤があり、石橋を渡つてその流の左岸を行つて、暫時澤と分れて、下からそれと望まれる燒山目指してやゝ急な路を登るのだが、小松の生えたこの尾根は、ナラ、ヤマハンノキ、カシハ等の雜木の丈低く、日光直射下では一汗かゝざるを得ない。八〇〇米の邊に餘程の日照り季でない限り薄紫のキクザキイチリン草の根元を洗うて、さゝやか乍ら清水のあるのは何よりである。水からは可愛らしいヒトリシヅカの叢生や、ヒメスミレ、タチツボスミレの咲く美しい山路で、鳥屋からの山巓路と合して頂上に着く。

燒山二等三角點からは、道は只一統、山稜につけられた徑はカヤトの中に極めて明瞭で、堂々たる蛭ヶ嶽から左へ鬼ヶ岩、不動ノ峯となり、又一段と隆起して丹澤山となる亘きなうねりと丹澤三峯(本間ノ頭一三四五米▲、圓山木ノ頭一三四〇米、大禮の頭一三二〇米)の蓁々たる姿を早戸の深谷を挾んで絕えず眺めつゝ輕い登りを續けるので、黍殼(一二七二、八米▲)から十分程下つた東の谷井戸澤源頭の水は縦走路尾根近い水として重要な役割を持つものであらう。(澤に下り三分)

眺望の佳い太い尾根道は點々マメザクラの美花を左右に連ね、春のおぼろに霞む山々を飽く事もなくのん氣に辿ることができる。

やがて展開さるゝ麗しき高原は姫岳と名付くる草原で、春の綠青、秋の黃赤、多の銀白、蛭ヶ嶽のドームを望んで單に風色に於て東京附近の山に有數なるばかりでなく、蛭ヶ嶽北方の準平原の遺跡として關東山地に於て學術上重要なる地貌を一眸する事がこゝに出來る。かくの如く準平原の遺跡の顯著なるは他に本間氏によつて神綳の北方八二〇米附近を指摘され兩者共丹澤山塊であるのは丹澤愛好の士の嬉しいことである。

姫岳より西に走る一四三一米▲の峯は袖平ノ頭といはれ禾本科の植物カリヤスが殊に多いのでカリヤスといふ名でも呼ばれてゐる。カリヤスは往時乾し貯へて黃色の染料としたものだが鑛物性染料全盛の現今さてどうであらうか。その西の獨立標高點一〇六一米は風巻となつて尾根は二分し神ノ川の東岸で何れも消滅するが、長者小屋からこの尾根にかけては、ミツバツゝヂの大群落多く季節には一遊に價する。

姫次の東南の緩い斜面を大平といひ、東南と南に二つの澤を落してゐるが、前者を笠置澤、後者は原小屋澤といひ共に滑り瀑の澤に落ち末は雷淵で中ノ澤(不動ヶ峯發源)、大瀧ノ澤(丹澤山と不動ヶ峯鞍部に發源)に合流、水勢操琴、早戸川を形成するものである。

姫次(岳)より蛭ヶ嶽に向ふ徑は舊時は、姫次の迷路などゝいつて、ずいぶん迷はされたものであるが現今は登山者が多く良く踏固められて迷ふ樣なことはない。要するに笠置澤と原小屋澤の間の尾根に入らないやうに、それには蛭に直線の廣い尾根でなく原を神ノ川に向つて一寸下ると先前の尾根筋に平行した小尾根で、その間には空澤(原小屋澤源窪)が入つて來てゐる。この邊から氣持ち佳い青々としたスヾタケの尾根になるのだが、近時こゝに檜の殖林を試みてスヾタケも大部取拂はれてしまつた。徑は姫岳から輕い下りで、地藏澤源頭に達する。こゝには道標があり、徑から分岐して左へ下ると「水及び小屋あり」と書かれてゐる。

下り七、八分で、舊小屋と水が菊咲一輪草の中にあるが、更に下れば昭和八年新造の間口三間、奥行五間材木拔きの費用のみ二百何十圓を要したといふ官設の丹澤隨一の立派な小屋がある。この小屋には筆者偶然昭和八年四月廿八日當時未だ檜植林中の人夫三十餘名と親方といふ植林指導員と泊り合せた。偶然かその日が植林事業完了の日で、山の話から小屋の話に移りこの小屋は如何するのかと問ふた處、明日よりこの儘に殘して置くとの事に感謝はしたが、一方番人でもゐなければこの新しい氣持良い柱や羽目もあの床も心ない落書で汚され從前の、上の小屋の樣に破られるのではないかと指導員がいつてゐたが、爾來一年未だ再訪の機を得ないがどうなつてゐるであらうか。

本題に歸り、山徑に從ふとブナやミヅナラにサルオガセが懸り、漸く密林は深さを加へて來る。ボツチとは地藏澤と大瀧澤の中間の澤即ち蛭ヶ岳よりの二つの澤が、北と東に發源してをるが、その北裾の澤をボツチ澤といふので、その源窪と思へば良い、取立てゝ書く程の興味もない處である。東裾の澤は又兵衞澤といふ。蛭ヶ岳までに徑が二岐する處があり、右は登り、左は山腹を巡つて澤に一寸下るやうに見えるが、左が良いので、右を進むと神ノ川の目の眩むやうな斷崖の上に出て道は盡きる。しかしその臺地上からは蛭ヶ嶽より臼ヶ岳となり、檜洞丸の亘姿は眉を壓して立ち熊笹、大群、加入道の亘彈相連れて並立つ壯觀に接する事が出來る。

蛭ヶ嶽に愈ゝかゝると密林の樹幹には鮮苔類の着生夥しくクモラン、ツリシュスラン等も見出すことが出來る。密林中はさすがに熊笹の猛威も勢を修めるので割に氣儘にエンレイサウやマヒヅルサウの花を、徑を離れて求め乍ら登られる。

徑の急傾斜が次第に緩むと山頂は近い。蛭ヶ嶽は毘盧舍那佛を祀るにより、亦其形から毘盧ヶ嶽とも、又藥師如來を勸請するに因り藥師ヶ嶽ともいふが本項には地圖により簡明な蛭ヶ嶽を取つてをいた。尤も山蛭とは何の緣もない。山頂には粗末な小屋が一六七二米三角點の傍らにある、山頂の休憩所の意味で、麓で建てたのだらうで、泊る事は一寸不可能である。泊るには臼ヶ岳寄りに藁小屋がある。幕營に水はないが、熊木澤寄りの山頂附近、測量に際し伐採した處に古木の薪が豊富で良い。但し時季(初夏—夏)によりダニが多く閉口することもある。

蛭ヶ嶽より東南に山徑の印せられた儘に一二〇米を下り、次に鬼ヶ岩といふ顯著な岩の急傾斜八〇米の登りがあり、一寸下つて不動ヶ峯(一六〇〇米)にと再び尾根は續く。

不動ヶ峯は、諏訪不動明王を古來祀り、賽路は早戸川大平より大瀧に契ぎ、大瀧澤を登つて丹澤山と不動ヶ峯南端との鞍部に出で、この峰に出たものであるが、大平奥の路は震災で壞滅して仕舞つた。

不動明王の信仰は蛭ヶ岳の藥師に勝る盛んなものであつたといふ。密林の隙から時折見える玄倉川は脚下七〇〇米の下に山を繞つて曲流逶迤として銀龍の這ふが如くで山巓縦走者の胸に一度はこの澤に入つて見やうといふ強い愛着を生ぜしめずにはをかぬ。

不動ヶ峯から徑は東に向ひ小さい隆起を越して、丹澤山の登りと、これからならうといふ最低鞍部即ち早戸川大瀧の源頭鞍部を大瀧に向ひ、ちよつと下つた處に湧水がある。丹澤山の水は遠いのでこゝで用意するが良からう。

やゝ細長い熊笹の鞍部から一息登ると、トウギバウシの多い平に出で、右へと藪道から解放されると、丹澤山一等三角點一五六七米の氣持良い山頂である。

丹澤山なる地名を新編相模風土記に見ると

「太武坐波屋滿　山中喬木蓊鬱トシテ良材ニ富リ　按ズルニ元龜天正ノ頃北條氏ノ命ニヨリ煤ヶ谷七澤邊ノ村々ヨリ良材ヲ小田原ニ運致セシコトアリ是皆此山ニ採シナルベシ關東御打入以來山中スベテ御林トナリ」とありその丹澤山なる地域も塔ヶ岳より蛭ヶ岳にかけ、中津川源谷一帶の密林を包括する廣大な山々を指したものであつた。これに因つてか舊陸測圖にも札掛の南約一キロの個所に漠然と丹澤山と印刷してゐたが昭和八年一月發行のものより登山者一般の呼稱と一致、從來無名のこの三角點に丹澤山の文字が書入れられた。然し丹澤山とは古來は所謂東丹澤一帶に亘る呼稱であつた事は上述の通りであるといふ事を一應御承知願ひたい。しからばこの山頂は何といはれたかといふに、愛甲、津久井、足柄上の三郡の郡界なるより三境、玄倉にては御本ノ平といつてゐた。三角點には櫓も測量當時の藁葺の小屋もある。水は壚水澤源流まで餘程下らねばならぬ。

丹澤山から續いて行手に來る一五〇〇米强の狹長の笹原龍ヶ馬場はある意味で凄慘な丹澤の尾根に一脈の明るさを與へる處である。けれども綠のカーペツトの樣な丈低い笹の下に縦走路にまで喰込んで左にはオバケノ澤、右からは簓杉澤の幾多の源谷のガレがふいに露はれて膽を冷やされる。再び森林に入ると、ツガ、モミ、トチ、ブナ、ソロ、カヘデの針濶混淆林の美は丹澤御料地の誇を今に變へず、ウグヒス、コマドリの美音の絶ゆることもない。幾度かの上下で小さい突起の幾つかを越して約八十米を昇ると濶然樹林は盡きて丹澤山縦走の南部隨一の展望臺塔ヶ嶽一四九一米の三角點所在の山頂である。絶好な位置を占むるこの山は富士、愛鷹、天城、足柄、箱根は勿論、足下の秦野盆地、陶綾の臺地江ノ島、三浦、房總の半島を一眸に箱庭の如く見る事が出來る。

塔ヶ嶽の尊佛に就いては新編相模風土記に、

「塔ヶ岳　玄倉村東大住郡界ニアリ此山ノ中腹ニ土俗黒尊佛ト唱フル大石アリ。高五丈八尺許其形座像ノ佛體ニ似タリ。故ニ此稱アリ。此山ヲ他郷ニテハ尊佛山ト唱フ。土民ノ說ニ旱魃ノ時。登山シテ此石ニ祈請シ。雨ヲ乞ト云。又石上ニ生スル苔ヲ土人御衣ト稱シ痼疾ヲ煩フ者アレバ。是ヲ取テ煎シ用。必効驗アリ。」とある。因つて塔ヶ嶽は一名尊佛山の名のある事、大山(雨降山)に於けると同じ樣に巨岩崇拜の現象をこゝにも採集する事が出來るが、不幸にして簓杉澤下降路の右手に大金澤に面して所在した尊佛岩は大地震の前にはその靈力も發揮せず山腹一帶の巖木と運命を共にした。地圖に孫佛と地名のみ存して露岩の符號の削除された所以である。

塔ヶ嶽の祭禮は今に毎年五月十五日に行はれる。頂上の北側の西に「不動ノ清水」がある。

塔ヶ嶽より東を指す新大日より札掛(又は諸戸)に下る岐路を見送つて南へ南へと樹木もない草地を一散に下る氣持はよい。春には可愛らしいセンボンヤリが綠草に笑つてゐる。尾根は四十八瀨川の脚下の瀨音を伴奏に今一度振返へる塔ヶ嶽、丹澤山主峯に急ぐ中にも今日一日の山旅の回顧に「過ぎ來し山への愛惜」の念を昂めずにゐられない。イカリサウの美しい山腹を最後に下りきると大倉で、後は部落の旦路一里程で澁澤の驛へ出る。